

SSF スポーツライフ・データに基づく 1994~2016 年のランニング人口増減の属性別分析

健康スポーツマネジメントコース

5018A305-9 内山 智

研究指導教員：中村 好男 教授

【背景】

SSF 笹川スポーツ財団スポーツライフ・データによると、ジョギング・ランニングを実施した成人の数は 2012 年に 1000 万人を超えたと推計されている。10 年前の 2002 年の同調査での推計は 483 万人であることから、日本のランニング人口は増加してきていると言える。

【問題の所在】

山中(2010,269-273)、清水(2015,131-141)の様に、2000 年代後半のランニング人口についての先行研究は複数存在している。また山中(2010,270-1)によると~1995 年は「安定期」、1996 年~2006 年は「低迷期」、以降は「再生期」であると位置づけられているが、実際のランニング人口の増減については調査されていない。また SSF スポーツライフ・データによるとこれらの時期の中でもジョギング・ランニング実施率は変動している。この変動の原因は不明であり、また 1990 年代~2010 年代のランニング人口を属性ごとに分析した先行研究はない為、SSF スポーツライフ・データのジョギング・ランニング実施率を属性ごとに分析し、実際のランニング人口増減の詳細を調査したい。

【目的】

1994~2016 年のランニングの人口増減の詳細を明らかにする為、SSF スポーツライフ・データのランニング人口関連データを調査しその傾向を明らかにする。

【1】1994~2016 年のジョギング・ランニング実施率の変化とその傾向を明らかにする。

【2】東京マラソン開始の 2007 年を境とし、様々な属性のジョギング・ランニング実施率について、1996~2006 年と 2008~2016 年でその高低を比較し、変化した属性とその傾向を明らかにする。

【3】1994~2006 年のジョギング・ランニング実施率が 10 年後(2004~2016 年)にどのように変化しているかについて、その変化率の性差を検討し、性差が顕著な属性とその傾向を明らかにする。

【対象】

・SSF 笹川スポーツ財団の成人スポーツライフ・データ 1994~2016 のローデータ(対象：成人)

※笹川スポーツ財団 HP の「ジョギング・ランニング実施率の推移」より「① 成人のジョギング・ランニング実施率の推移 (1998 年~2016 年)：全体・性別」と、「② 成人のジョギング・ランニング実施率の推移 (1998 年~2016 年)：性別×年代別」からもデータの引用を行った。

図 1：SSF スポーツライフ・データのアンケート対象者の人数(SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994~2016 より作成)

	1994年	1996年	1998年	2000年	2002年	2004年	2006年	2008年	2010年	2012年	2014年	2016年
男女合計(人)	1596	1571	2322	2232	2267	2288	1867	2000	2000	2000	2000	2926
男性(人)	793	762	1149	1100	1107	1125	894	988	983	990	989	1453
女性(人)	803	809	1173	1132	1160	1163	973	1012	1017	1010	1011	1473

【方法】

SSF スポーツライフ・データ 1994~2016 からジョギング・ランニング実施者を抽出し、属性ごとの実施率の比較を行う。変化が顕著な属性については、その変化率も算出し比較する。Microsoft 社 Excel、(株)データサイエンス研究所 Rviewer を使用(調査期間：2018/11/15~2019/2/15)

【1】『1994~2016 年の期間中の実施率の変化』

SSF スポーツライフ・データ 1994~2016 をクロス集計(Excel)で調査し、実施率の変化とその傾向を明らかにする。特に 1994 年と 2014 年、1996 年と 2016 年の 20 年後の実施率の変化についても調査する。また全体の[年 1 回以上][ライト層][中間層][コア層][20 代][30 代][40 代][50 代][60 代][70 代以上]の実施率についてピアソンの積立相関係数を検定し(Rviewer)、属性ごとの全体の実施率との相関係数を算出する。

【2】『1996~2006 年の実施率と 2008~2016 年の実施率の平均の比較』

1996~2006 年と 2008~2016 年の「性別、実施頻度、年代」で分類された各属性の実施率の平均を、対応のない 2 標本の片側 t 検定(Excel)で比較し、属性ごとの実施率平均の差を明らかにし、その差がどの様な属性に出ていたか、その傾向を調査する事で、二つの時期の属性ごとの実施率の違いの傾向を明らかにする。

【3】『1994~2006 年の各年代の実施率の 10 年後の変化率の平均の男女の比較』

「1994~2006 年の 20~60 代の各年代のジョギング・ランニング実施率」に対する「10 年後(2004~2016 年)の 30~70 代のジョギング・ランニング実施率」の変化率の平均の性差を対応のある 2 標本の片側 t 検定で比較する事で、どの年代で実施率の 10 年後の変化に性差が出ていたか、その傾向を明らかにする。

【ジョギング・ランニング実施者の属性の分類基準】

性別×実施頻度×年代(単一年代、または連続する複数年代の合計)

性別 [全体][男性][女性]

実施頻度 [年 1 回以上(全実施者)][週 1 回以上(中間層+コア層)][週 2 回以上(コア層)]...3 実施頻度

[年 1 回以上週 1 回未満(ライト層)][週 1 回以上週 2 回未満(中間層)]...5 実施頻度

年代 [20 代][30 代][40 代][50 代][60 代][70 代以上]と連続する 2~5 年代合計

※ジョギング・ランニングの実施頻度に関して、スポーツライフ・データに詳しい記載がない場合、年間実施回数で 52 回以上を週 1 回以上実施したもの(年間 52 回=週 1 回)とみなし、年間実施回数で 104 回以上を週 2 回以上実施したもの(年間 104 回=週 2 回)とみなす。

【結果 1】『1994~2016 年の期間中のジョギング・ランニング実施率の変化』

【1-1】全体のジョギング・ランニング実施率の推移

実施者の割合は 1994 年に高い割合であったが下降し、その後 2000 年と 2004 年に一時的に上昇し、2008 年~2012 年にかけても上昇していた(図 2)。

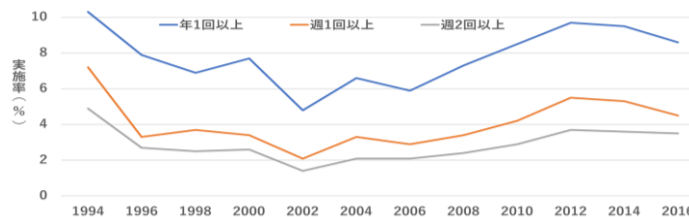


図 2：ジョギング・ランニング実施率(SSF 笹川スポーツ財団スポーツライフ・データ 1994~2016 より作成)

【1-2】全体の頻度別ジョギング・ランニング実施率の推移

1994 年から 1996 年にかけて中間層とコア層が大きく実施率が低下していた。逆にライト層は 1994 年から 1996 年にかけて実施率が上昇し、2000 年と 2008 年以降も高い割合であった。2004 年は 3 属性全てで増加していた(図 3)。

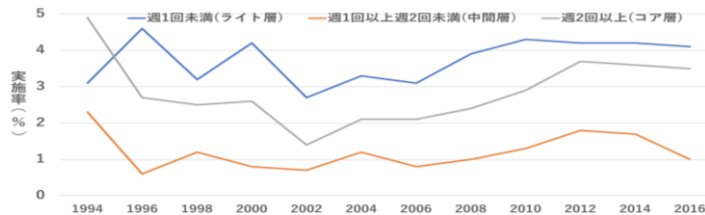


図 3：頻度ごとのジョギング・ランニング実施率(SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994~2016 より作成)

【1-3】性別のジョギング・ランニング実施率

2000 年と 2004 年と 2008~2012 年は特に男性の実施率が上昇していた。また 1994 年と 2012 年の男性の実施率は特に高かった(図 4)。



図 4：性別のジョギング・ランニング年 1 回以上の実施率 (SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994~2016 より作成)

【1-4】全体のジョギング・ランニング年 1 回以上の年代別実施率の推移

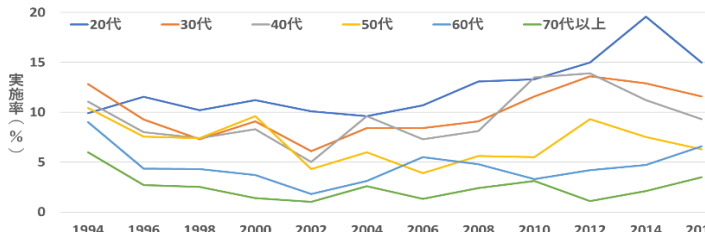


図 5：全体のジョギング・ランニング年 1 回以上の実施率の推移(SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994~2016 より作成)

【1-5】全体のジョギング・ランニング週 2 回以上の年代別実施率の推移

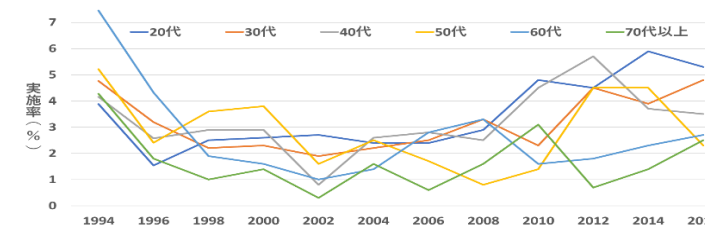


図 6：全体のジョギング・ランニング週 2 回以上の実施率の推移(SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994~2016 より作成)

【1-6】男性のジョギング・ランニング年 1 回以上の年代別実施率の推移

男性では 2000 年と 2004 年に、他の年代と比較して 30 代~50 代が大きく増加していた。2012 年と 2014 年の実施率は 20 代~40 代の実施率が高かった(図 7)。

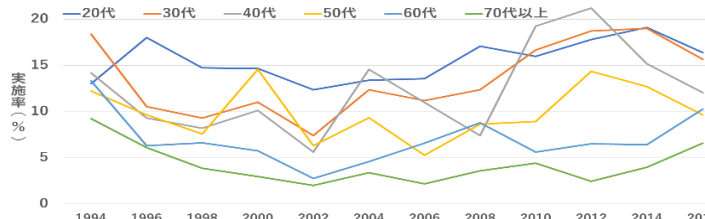


図 7：男性の年代別ジョギング・ランニング年 1 回以上の実施率 (SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994~2016 より作成)

【1-7】女性のジョギング・ランニング年 1 回以上の年代別実施率の推移

20 代が 2006 年~2014 年にかけて大きく増加し、30 代以上と比較して高い割合を維持している。

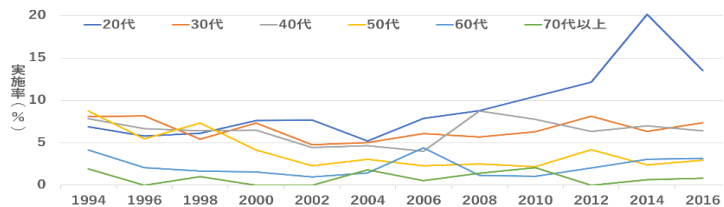


図 8：女性の年代別ジョギング・ランニング年 1 回以上の実施率（SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994-2016 より作成）

【1-8】1994～2016 年の全体の年 1 回以上の実施率と各属性の実施率の相関

1994～2016 年の実施率について、全体の「年 1 回以上」と「頻度別、年代別各属性」の相関をピアソンの積立相関係数で検討した結果、「年 1 回以上」との相関は「頻度別属性」ではコア層、中間層が有意に相関しており、「年代別属性」では 30 代、40 代、50 代、60 代が有意に相関していた。またコア層と 30 代は、特に強い相関を示していた(図 9)。

図 9：1994-2016 年の年 1 回以上の実施率と各属性の実施率の相関（SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994-2016 より作成）

全体	ライト層	中間層	コア層	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
年1回以上	.55	.77**	.95**	.55	.94**	.81**	.74**	.60*	.55
有意確率	.066	.003	.000	.067	.000	.001	.006	.038	.064

【結果 1 のまとめ】『1994～2016 年の実施率の変化とその傾向』

全体の実施率の傾向として、1994 年と 2014 年の実施率が高く、2000 年と 2004 年と 2008～2014 年にそれぞれ実施率が高まっていた(図 2)。1994 年から 1996 年にかけての全体の実施率の低下には(図 2)全年代での中間層とコア層の実施率低下が影響していた(図 3)。2000 年と 2004 年の実施率の高さには(図 2)男性の実施率の高さ(図 4)が影響しており、男性の中でも特に 30 代～50 代の実施率の高さが影響していた(図 7)。2012 年と 2014 年の全体の実施率の高さには(図 2)特に男性の 20 代～40 代と女性の 20 代の実施率の高さが影響していた(図 7.8)。全体の実施率と非常に強い相関を示していた属性はコア層と 30 代であった(図 9)。

【結果 2】『1996～2006 年の実施率と 2008～2016 年の実施率の平均の比較』

「1996～2006 年のジョギング・ランニング実施率の平均」と「2008～2016 年のジョギング・ランニング実施率の平均」の比較(対応のない 2 標本の片側 t 検定)

- ・全体の 5 実施頻度[年 1 回以上][週 1 回以上][週 2 回以上][ライト層][中間層]
- ・全体の年代性[30 代][40 代][50 代][60 代][70 代以上]の 6 年代×5 実施頻度
- ・男性と女性の 2 性別×5 実施頻度・男女の[20 代]～[70 代以上]の 2 性別×6 年代(年 1 回以上実施)

5+30+10+12=『計 57 属性』(全体 35 属性、男性 11 属性、女性 11 属性)の

[1996/1998/2000/2002/2004/2006]と[2008/2010/2012/2014/2016]の実施率平均の比較

【2-1】各属性の実施率の平均の比較の結果(全て df=9)

図 9：1996～2006 と 2008～2016 各属性の実施率の平均の比較の結果（SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994-2016 より作成）

全体(頻度別)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=	全体(ライト層)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=
年1回以上	6.6	8.7	.005 3.65**	20代	7.0	7.8	.137 1.63
週1回以上	3.1	4.6	.004 3.87**	30代	5.0	6.0	.080 1.97
週2回以上	2.2	3.2	.006 3.60**	40代	4.1	5.7	.009 3.30**
ライト層	3.5	4.1	.053 2.23	50代	2.5	3.0	.170 1.49
中間層	0.9	1.4	.017 2.91*	60代	1.2	1.7	.172 1.48
				70代以上	0.6	0.4	.233 1.28
全体(年1回以上)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=	全体(中間層)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=
20代	10.6	15.2	.001 4.68**	20代	1.2	2.7	.023 2.73*
30代	8.1	11.8	.001 4.63**	30代	0.8	2.0	.003 3.78**
40代	7.6	11.2	.009 3.35**	40代	1.1	1.6	.145 1.60
50代	6.5	6.8	.378 0.93	50代	1.4	1.1	.186 1.43
60代	4.7	4.7	.121 1.71	60代	0.4	0.6	.179 1.46
70代以上	1.9	2.4	.166 1.51	70代以上	0.2	0.1	.368 0.95
全体(週1回以上)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=	全体(週2回以上)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=
20代	3.5	7.4	.002 4.39**	20代	2.4	4.7	.001 5.21**
30代	3.2	5.8	.000 9.43**	30代	2.4	3.8	.007 3.49**
40代	3.6	5.5	.019 2.86*	40代	2.4	4.0	.016 2.98*
50代	4.0	3.8	.428 0.83	50代	2.6	2.7	.452 0.79
60代	2.6	3.0	.245 1.24	60代	2.2	2.3	.392 0.90
70代以上	1.3	2.0	.074 2.02	70代以上	1.1	1.9	.072 2.04

男性(頻度別)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=	女性(頻度別)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=
年1回以上	8.9	12.2	.004 3.86**	年1回以上	4.4	5.2	.064 2.11
週1回以上	4.5	6.7	.004 3.84**	週1回以上	1.8	2.5	.047 2.30*
週2回以上	3.3	4.7	.015 3.00*	週2回以上	1.2	1.7	.051 2.25
ライト層	4.5	5.5	.018 2.89*	ライト層	2.6	2.7	.404 0.88
中間層	1.2	1.9	.004 3.89**	中間層	0.6	0.8	.119 1.72
男性(年代別)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=	女性(年代別)	1996～2006 平均	2008～2016 平均	確率(p)= t=
20代	14.5	17.3	.011 3.21*	20代	6.7	13.0	.004 3.87**
30代	10.3	16.5	.001 5.11**	30代	6.2	6.8	.205 1.37
40代	9.8	15.0	.039 2.42*	40代	5.5	7.3	.013 3.10*
50代	8.8	10.9	.141 1.62	50代	4.1	2.9	.112 1.76
60代	5.4	7.5	.037 2.44*	60代	2.0	2.1	.460 0.77
70代以上	3.4	4.2	.208 1.36	70代以上	0.6	1.0	.197 1.39

【結果 2 のまとめ】『1996～2006 年の実施率と 2008～2016 年の実施率の平均の比較』

1996～2006 年と 2008～2016 年のそれぞれの実施率の平均の比較において、全 57 属性中 52 属性で 2008～2016 年の実施率平均の方が高かった。全体の実施頻度別で有意差が認められた属性は、ライト層以外の 4 頻度、同じく男性では 5 頻度全て、女性では週 1 回以上のみであった。年代別属性では全体、男性、女性いずれも 40 代以下の多くの属性で有意差が認められた。例外として 50 代以上では、男性の 60 代でのみ有意差が認められた。逆に 1996～2006 年の実施率平均の方が高かったのは 50 代で 4 属性、70 代で 1 属性存在していたが、しかしいずれも有意差は認められなかった(平均値に赤い下線の属性)。

【結果 3】『1994～2006 年の各年代の実施率の 10 年後の変化率の平均の男女の比較』

「1994～2006 年の 20～60 代の各年代のジョギング・ランニング実施率」に対する「10 年後(2004～2016 年)の 1 つ上の年代のジョギング・ランニング実施率」の変化率の平均の男女差の比較(対応のある 2 標本の片側 t 検定)

- ・[20 代][30 代][40 代][50 代][60 代] ・[20～30 代][30～40 代][40～50 代][50～60 代]
- ・[20～40 代][30～50 代][40～60 代] ・[20～50 代][30～60 代] ・[20～60 代]の 15 年代×3 実施頻度

計 45 属性の[94/96/98/00/02/04/06]の 10 年後[04/06/08/10/12/14/16]の 1 つ上の年代属性の変化率

(例)	1994	1996	1998	2000	2002	2004	2006	2008	2010	2012	2014	2016	変化率の平均
30代の実施率													
20代の実施率	5	6	7	8	9	10	11						
10年後の変化率	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%						

【3-1】各年代の実施率の 10 年後の変化率の平均の比較(全て df=12)

図 10：1994-2006 各年代の実施率の 10 年後変化率平均の男女の比較の結果（SSF 笹川スポーツ財団 スポーツライフ・データ 1994-2016 より作成）

年1	10年変化率の平均	年1	10年変化率の平均	年1	10年変化率の平均
20代男性	9.1 確率(p)=.154	20～30代男性	19.1 確率(p)=.117	20～40代男性	15.6 確率(p)=.033*
20代女性	-3.2 t=-1.52	20～30代女性	0.3 t=1.69	20～40代女性	-14.7 t=2.40
30代男性	36.5 確率(p)=.167	30～40代男性	6.4 確率(p)=.011*	30～50代男性	9.2 確率(p)=.019*
30代女性	7.2 t=1.47	30～40代女性	-22.4 t=3.01	30～50代女性	-25.9 t=2.70
40代男性	7.1 確率(p)=.015*	40～50代男性	-5.4 確率(p)=.010*	40～60代男性	-9.1 確率(p)=.006**
40代女性	-47.7 t=2.82	40～50代女性	-42.6 t=3.04	40～60代女性	-47.2 t=3.31
50代男性	-10.6 確率(p)=.108	50～60代男性	-20.0 確率(p)=.054	週1 10年変化率の平均	
50代女性	-33.3 t=1.74	50～60代女性	-45.9 t=2.13	20～40代男性	35.0 確率(p)=.057
60代男性	-33.3 確率(p)=.220	週1 10年変化率の平均		20～40代女性	7.3 t=2.11
60代女性	-50.8 t=1.30	20～30代男性	46.0 確率(p)=.427	20～50代男性	21.3 確率(p)=.062
週1		20～30代女性	39.6 t=0.82	30～50代女性	-15.0 t=2.06
20代男性	32.3 確率(p)=.089	30～40代男性	40.3 確率(p)=.024*	40～60代男性	1.0 確率(p)=.055
20代女性	121.6 t=1.85	30～40代女性	-9.2 t=2.58	40～60代女性	-33.1 t=2.13
30代男性	73.8 確率(p)=.439	40～50代男性	3.6 確率(p)=.063	週2 10年変化率の平均	
30代女性	59.2 t=0.80	40～50代女性	-25.2 t=2.04	20～40代男性	40.7 確率(p)=.0099**
40代男性	20.3 確率(p)=.007**	50～60代男性	-10.7 確率(p)=.332	20～40代女性	-59.0 t=3.06
40代女性	-24.3 t=3.24	50～60代女性	-26.7 t=1.01	30～50代男性	39.1 確率(p)=.230
50代男性	-5.7 確率(p)=.432	週2 10年変化率の平均		30～50代女性	3.0 t=1.26
50代女性	-12.0 t=0.81	20～30代男性	43.5 確率(p)=.461	40～60代男性	15.2 確率(p)=.188
60代男性	2.2 確率(p)=.442	20～30代女性	40.0 t=0.76	40～60代女性	-17.9 t=1.39
60代女性	7.2 t=0.80	30～40代男性	50.8 確率(p)=.319	週1 10年変化率の平均	
週2		30～40代女性	27.3 t=1.04	20～50代男性	8.9 確率(p)=.006**
20代男性	34.4 確率(p)=.####	40～50代男性	30.9 確率(p)=.139	20～50代女性	-36.6 t=3.35
20代女性	#DIV/0! t=####	40～50代女性	-16.2 t=1.58	30～60代男性	6.5 確率(p)=.003**
30代男性	60.1 確率(p)=.479	50～60代男性	4.3 確率(p)=.422	30～60代女性	-60.9 t=3.75
30代女性	55.6 t=0.73	50～60代女性	-7.0 t=0.83	週1 10年変化率の平均	
40代男性	67.8 確率(p)=.030*	年1 10年変化率の平均		20～50代男性	22.1 確率(p)=.057
40代女性	11.8 t=2.45	20～60代男性	7.9 確率(p)=.012*	20～50代女性	-47.3 t=2.11
50代男性	29.3 確率(p)=.312	20～60代女性	-22.1 t=2.96	30～60代男性	17.9 確率(p)=.014*
50代女性	-1.9 t=1.06	週1 10年変化率の平均		30～60代女性	-72.1 t=2.88
60代男性	-7.1 確率(p)=.####	20～60代男性	19.8 確率(p)=.056	週2 10年変化率の平均	
60代女性	#DIV/0! t=####	20～60代女性	-8.8 t=2.11	20～50代男性	35.4 確率(p)=.104
		週2 10年変化率の平均		20～50代女性	-81.9 t=1.76
		20～60代男性	28.2 確率(p)=.245	30～60代男性	28.3 確率(p)=.060
		20～60代女性	3.5 t=1.22	30～60代女性	-78.9 t=2.07

【結果 3 のまとめ】『1994～2006 年の各年代の実施率の 10 年後の変化率の平均の男女の比較』

全 45 属性のうち、単一年代コア層の 20 代と 60 代の 2 属性の変化率の算出において、四捨五入で実施率 0%の年が一部存在しており変化率算出不能のエラーが生じ、この 2 属性のみ検定不能であった(青丸印)。検定結果の出た合計 43 属性のうち、単一年代週一回以上の 20 代と 60 代の 2 属性で 10 年変化率の平均が男性より女性の方が高かったがいずれも有意差は認められず(赤丸印)、この 2 属性を除く 41 属性で 10 年変化率の平均が女性より男性の方が高かった。この 41 属性のうち、14 属性で有意差が認められた。男性の方が有意に高かった 14 属性を実施頻度別で見ると、「年 1 回以上」の属性が 9、「週 1 回以上」の属性が 4、「週 2 回以上」の属性が 1 であった。40 代では 3 実施頻度全てで性差が出ており、また有意差が認められたのは全て「40 代を含む属性」であった。

【考察】

【1】1994～2016 年の実施率に関して、全体の実施率と属性別実施率の相関を調べたところ、頻度別ではライト層の実施率のみ全体と相関していなかった。ライト層の実施率の高さは中間層とコア層より概ね高かったが、中間層とコア層が似た推移をしていた為にこの 2 層が全体の実施率の推移に影響力を有し、全体と相関していたのだと考えられる(図 9)。

【2】1996～2006 年と 2008～2016 年の実施率の平均の比較では、40 代以下で 2008～2016 年の実施率平均の方が有意に高い属性が多く、同じく男性の全 5 頻度で 2008～2016 年の方が有意に高かった。逆に 1996～2006 年の実施率の平均の方が高かった属性では 50 代が多かった(図 9)。従って 1996～2006 年より 2008～2016 年の方が実施率が高い傾向は男性と 40 代以下で強く、50 代以上で弱かったと言える。特に 50 代には 2006 年以前の実施率が高い傾向があり、50 代女性は 1998 年、50 代男性は 2000 年に実施率が高かった(図 5、7、8)。

【3】1994～2006 年の各年代の実施率の 10 年後の変化率の平均の男女の比較において、単一年代で 1994～2006 年の実施率の 10 年後の変化率の男女差に有意差が認められたのは 40 代のみで、また連続する複数年代での比較でも 40 代を含む属性でのみ有意差が認められた(図 10)。これは 50 代男性の 2008 年以降の実施率は 50 代女性の 2008 年以降の実施率が、60～70 代以上と同等程度に低迷していたせいで事が影響したと考えられる(図 8)。

【総合考察】ライト層の実施率は 1996 年と 2000 年と 2008 年 2010 年に上昇し、男性の 30 代～50 代の実施率は 2000 年と 2004 年と 2008 年 2010 年に上昇している(図 3、4)。これらの背景として、1996 年に成人病の生活習慣病への改称、2000 年 3 月に健康日本 21 が策定、2002 年 8 月に健康増進法が公布され 2003 年 5 月に施行、2008 年 4 月から特定検診、特定保健指導が始まった事が影響している可能性が考えられる。つまり 2000 年、2004 年、2008～2010 年にそれぞれ全国的に健康や体型に対する意識の向上が図られ運動習慣の重要性が広まり、それがライト層や 30 代～50 代の男性のジョギング・ランニング実施率上昇に影響したと考えられる。また 20 代女性の実施率が 2006～2014 年まで上昇し続け、2014 年には大きく上昇し 20.1%と同年代男性(19.1%)を上回っていたが、これは「マラソンは美容と健康によいという報道の仕方」清水(2015,133)の影響であったと考えられる。

【結論】

SSF スポーツライフ・データのジョギング・ランニング実施率の増減を属性ごとに分析した結果、1994～2016 年のランニング人口については性別では男性、頻度別ではコア層、年代別では 30～40 代が核となり、彼らの増減と共に全体が増減し、その内訳は大きく変化していたことが分かった。また 1996～2006 年と 2008～2016 年のランニング人口の比較では、男性や 40 代以下の多くの属性において 2008～2016 年の方がランニング人口は増加し、全体としても概ね増加していた。同じく様々な属性の 1994～2006 年の実施率の 10 年後の変化を調査したところ、多くの属性で女性より男性の方が大きく増加していたか、減少が小さかった。

よって今後のランニング人口の拡大と定着の為に、男性とコア層と 30～40 代を中心にアピールし、更に 20 代女性にもアピールし続けていくことが必要だと考えられる。